

世界の中の四国

四国経済連合会副会長(住友共同電力㈱社長) 黒木 明德



四国の中にどっぷりと浸かっていると、まるで世界の流れとは隔絶しているように錯覚する事もしばしばです。四国は自然が豊かで、峠や岬を越えると人情や町の風情が変わるので旅を感じ、私は毎月のように四国中を駆け巡っています。しかし、四国に限らずどの地でも世界に影響し、また影響されているのではないのでしょうか。生活消費財を例にとると、我々が口にしている食材、衣料は言うにおよばず、電気製品やエネルギーにしても世界を感じずには居られません。中国や台湾製の電気製品や東南アジアの食材、遠洋で取れた魚などが身の回りに多くあります。

四国の農業、漁業が極東アジア、東南アジアをはじめとする海外の産品と競争をしていると同じく、四国の製造業もまたアジアやBRICsをはじめとした世界の製造業と熾烈な競争をしています。従事している産業で厳しいグローバル競争を展開する見返りが様々な世界の製品や商品の恩恵です。そのような中、秋田こまちや青森のりんごが海外でも人気を呼び、飛ぶように売れているとの報道がありました。海外品を受入れ、一方で自分の産品を積極的に売り込むことが必要と教えられたのです。四国の自然を売り込み、観光客を誘致するのもこの積極策の一形態でしょう。このための交通インフラの充実などがなされつつあり、生きる糧を得るための開発・産業育成を進めねばなりません。自然保護と開発の調整が必要です。

次に世界を感じることは、地球温暖化と自然災害の大型化でしょう。これは世界中が一緒に

克服すべき課題です。米国のゴア元副大統領は「不都合な真実」という本と映画で話題になり、今年のノーベル平和賞を受賞する事になりました。今、地球に居る動植物や人間はまさに宇宙船地球号の一員であり、一蓮托生の運命にあります。四国では自然保護が大切だから自前のエネルギーを開発する必要は無いと言いけることが正しいのでしょうか。今ある豊かな自然を少し犠牲にしても水力エネルギー、風力エネルギーを開発する努力をし、世界の一員としての務めを果たさねばなりません。地球全体の動植物が生き残るための開発と自然保護の調和がここでも必要と考えます。

世界を感じる事の最後は、申すまでも無く最近ニュースで目にする説明責任です。300年の歴史のある老舗の「赤福もち」は三重県の名産で私もよく土産に買っていました。食中毒を起したわけではありませんが、製造年月日や品質表示の偽装は食品製造業としての責務を問われ、非難を浴びています。企業は社会的責任としてコンプライアンスを最重要な柱とすることが世界の趨勢であり、日本にもその波が押し寄せてきた感があります。今や説明責任を果たせなければ企業としての存続も難しい時代と言えます。大企業だけでなく、中小企業や老舗の個人企業、農水産業者も同じです。生産地や賞味期限を正確に人々に伝える説明責任を果たさねばならない時代になったと感じています。世の中に四国ブランドを普及し、四国が自信を持ち輝けるか否かは私たちの努力次第です。